

豊かな感性を育む音楽教育

— 楽器の特性や音色を生かし、様々な表現を楽しむ —

Music Education that Nurtures Abundant Sensibility:
Enjoy various expression by taking advantage of the characteristics
and timbre of musical instruments

崎 元 りずみ*

(令和4年7月25日受理)

要約

幼児期において子どもは音楽と関わることで様々な体験をする。耳から聴く音は五感を刺激する。子どもの脳や心に音楽は大きな力を持って働きかける。幼児期の音楽教育を演奏技能の向上として取り扱うのではなく、情操面を育む教育として捉えたい。子どもは音に対して敏感に反応し、リズムや音色、楽器に興味関心を持っている。楽しむという経験があつてこそ自分なりの表現活動に繋がる。保育者に求められる音楽教育は子どもたちに音楽の楽しさ、面白さを存分に体験させることである。そのために、音楽のすばらしさを自らも感じ、楽曲や楽器の特性を生かした音楽活動の工夫が求められる。音楽教育は豊かな感性を育む人間教育であることを保育者は常に念頭に置いて子どもたちと関わっていくことが大切である。

キーワード：音楽教育、楽しむ、表現活動

keywords：Music Education, Enjoy, Expression

1. はじめに

様々なジャンルの音楽が溢れかえっている昨今、子どもたちも知らず知らずのうちに耳からの情報とし、音楽を浴びている。かつては、聴きたい音楽を選択し、レコードやCDをかけ聴くのがあたりまえであった。子どもに関して言えば、親が選んだ音楽を聴き、そして思春期になれば、自分の好みの音楽を自ら選んで聴く。たまたまテレビやラジオから流れる音楽にそこから興味が広がるといったものであった。自分自身の経験でいえば、道を歩いていると家の中からピアノの音や楽器を演奏している音が聞こえ、そこで曲を知ることよくあった。ベートーヴェンの「エリーゼのために」やブルグミュラーの「貴婦人の乗馬」などがまさにそのような感じだ。随分古い話だが、当時はピアノの普及も増加傾向にあり、子どものいる家庭ではピアノの練習をしている音がよく外

によく流れていたものだ。たどたどしい音も微笑ましいものであったが、現代社会ではその音も騒音と言われ、めっきりそのような光景はなくなった。防音対策がなされ、子どもの習い事も多様化しかつては小学生の半数ぐらいはピアノを習っていた時代と一変し、ピアノを弾いた経験のない子どもが逆に増えてきている。

本学の保育を目指す学生においても、ピアノ未経験者が多数みられる。中には、音楽に興味があり、それを生かし保育の道を選択している学生もいるが、全体としてみれば、僅かである。ピアノ経験の浅い学生にとって、苦手意識が払拭できないことは、場合によっては将来保育者になるのを諦める理由づけにもなりかねない。このような中で、将来保育者として音楽教育をどう目指していくのか、また、幼児教育において音楽はどのような位置づけにあるべきか改めて考え、音楽の本来

(* さきもと りずみ 保育科講師 音楽教育)

の楽しさを再認識することが大切と考える。

2. 子どもと音楽

(1) 日常を取り巻く音

冒頭で述べたように、子どもたちの生活環境に音楽はかなりのウエイトを占めている。朝の目覚めのアラーム、スマートフォンの着信音、家電から流れるメロディ音、駅の中、スーパーの中のBGM、子どもが自然に耳にする音の数は計り知れない。それは、無意識のうちに耳にするいわば受動的な音である。しかし、幾度も聞こえてくるうちそれは耳慣れた良く知っている音となり、次第に音に耳を傾け、自ら聴こうと能動的になる。音楽も同様である。そしていつしか心地よい旋律やリズムに心が躍る感覚を覚える。音楽は我々にどんな影響を与えているか、子どもたちは音楽を通して何を感じているのか、音楽教育の目指すところは何かを今改めて考え、方向性を探っていくと同時に、学生の実態を踏まえ本学において音楽教育をどのように行っていくか試行錯誤をしながらの日々である。

(2) 音から音楽へ

目を閉じていても誰が話しているのか聞き分けることができる。人の声には、高さ、声の質といった特徴があるが、一人ひとり違う。歌声についても同様である。しかし、普段しゃべる時と歌うときでは発声法が異なる。前者は胸式呼吸で、後者は複式呼吸である。いずれにしても、我々は様々な音質の声や、いろいろな高さの音を出すことができる。では、どのような時に使い分けるかとなると、まず、自然発生的な場合、ある種の感情表現、また、意図的な場の状況に合わせるなどである。これは、主に会話や独り言、スピーチなどといった、話し言葉においてである。歌声については、どうであろうか。歌が話し言葉から発生したものと捉えれば、同様といえる。では、発声法、呼吸法が違うという点からいうならば、音域を広げたり、より多様な声質を作り出したりするために、あえて発声法や呼吸法を変えていると考える。歌はより感情表現を持ち合わせている。ここで、歌、

歌唱を西洋音楽と結びつけてしまいがちであるが、日本の伝統的な音楽や、諸外国のケチャ、ホーミー、ヨーデルなども含まれることを忘れないでおきたい。

子どもたちが普段親しんでいる遊び歌は、もともとは遊ぶために作曲されたものではなく、子どもが遊んでいる中で自然発生的に生まれたものである。子どもは遊んでいるとき、気分が高揚し、仲間との関わり合いを楽しむ。子どもの声も普段の話声よりも少し高く、時には離れたところに届くような伸ばした声も出す。言葉自体の語呂合わせを面白がることもある。その言葉の抑揚が次第に節となり遊び歌となった。手や足を使い、また毬やこま、お手玉など遊び道具を使うときも歌いながらするとより楽しめる。わらべ歌はラの音から歌い出し、シの音やソの音に続く。順次進行で2度の音程で、最後またラで終わる曲が多い。これはラの音の高さが気分の乗った感情の時に出る声の高さに近いと考えられるからであろう。リズムもタン、タタといった、4分音符や8分音符から成る。言葉の数でリズムが変わり、音符が変化する。時には言葉を伸ばし、付点4分音符や2分音符のように長い音にもなる。また気分によっても様々なリズムが生まれる。スキップ、シンクペーションなどがそうである。ここで音から音楽へと変化している。

(3) 遊びの中から音楽が生まれる

子どもはうれしい時に体でその気持ちを表す。飛び跳ね、手足を動かし両手を高くあげる。膝を高く上げ、腕を前後に振りかざし飛び跳ねるスキップは、嬉しさや楽しさの表現でもある。スキップをしながら、次第に気持ちも高揚し笑顔となる。タッカのリズムを用いたスキップの曲はたくさんある。2拍子、4拍子の曲であれば、スキップのリズムに変えて演奏すれば容易にスキップの動きが可能である。子どもたちの感情は、音楽と融合され、子どもは音楽の中で楽しさを感じている。

遊び歌、童謡唱、唱歌は8小節から16小節の短い曲が多い。しかし、その短い1曲にも実に多く

の感動や思いが詰まっている。歌の歌詞に込められた思いは人それぞれ解釈も感じ方も違う。言葉に音の高さ、リズムがつけられ、詩が色彩を帯び広がる。遊び歌は音域も狭く、話し言葉に抑揚がついたものである。わくわく感や、仲間との会話が自然に旋律となる。曲の始まりの音も、ラの音が多く、子どもがはしゃぐ声のトーンに近い。童謡や唱歌の歌詞には、日本の四季や、身近な自然を題材にしたものが多い。その歌詞の言葉の抑揚、アクセントに音の上がり下がりやリズムの変化がつくことで、イメージ化が増す。これらの短い曲はわずか8～16小節程度ではあるが、そこにドラマがあるかのように、歌う度に楽しさや喜びがある。ここでも子どもたちは音楽の中で様々な感情を持ち、喜怒哀楽や自然や人とのつながりも体験する。

(4) いかにも子どもが楽しむか

幼児期の音楽活動は遊びの中で楽しむことに重要性を見出すことができる。保育者や周りの大人は子どもたちに、「上手にできたね」と声をかける場面があるが、その言葉自体はごく自然な表現であり問題はない。ただ大事なことは、ミスのない音楽や演奏を評価していると、子どもたちが思い込ませないようにしたい。本当に評価することは、子どもが楽しんだかということである。ここでは子どもは音の面白さを感じ、リズムの楽しさや音の重なり、躍動感を自ら体験する。友達と合わすこともそうである。偶然の中に面白さも存在する。子どもたちの遊びは、手を動かしたり触ったり飛んだり跳ねたりという、人が生きていく上で大切など動作や感覚につながる。そして、音楽の持つプレス、息づかひもそこに含まれる。楽しいと思えることが興味関心に結び付く。そこでさらに発展し、成長の糧となる。音楽というツールを使い、幼児期に表現する楽しさを存分に体験させることが音楽教育の役割である。そこで、保育者、教師は様々な工夫やアイデアを常に模索し、又自分自身もその楽しさを共有できるように音楽の面白さや魅力を感じ取った上で、子どもと向き合っていくことが望まれる。

3. 子どもと楽器

(1) 楽器を通して子どもとどう関わるか

子どもは楽器が大好きである。音の出るものに興味を示す。なんでも自分で触り、その音を楽しむ。楽器を見た瞬間から、手に取り音を出すだけで自然に笑顔になる。幼稚園で器楽合奏や楽器遊びはよく行うが、身近なところでは歌唱曲を楽器で演奏することをお薦めする。歌唱曲は、よく馴染みがあり短い曲が多い。その方法は工夫次第でたくさんある。最もよく行われるのは、歌唱曲に合わせて小物楽器でリズム打ちをする方法である。楽曲の構成上、曲想が変化するところで楽器を変えるなどすれば、曲自体のイメージも変わり、より楽しめる。またリズムを工夫することにより、変化をさらに加えることもできる。合奏において、休符を生かした演奏は、その楽曲の表現の幅を広げる。伸ばしているフレーズや、休符の箇所、音色が特徴的な打楽器のリズムが入ると、鳴らす側も聴き手もわくわくする。トライアングル、マラカス、ギロ、ウッドブロック、ボンゴなどといった小物打楽器は、音色の違いだけでなく、音の高低が楽しめるものもある。それらの面白さも楽曲の中で、休符や伸ばしがあれば、浮き出てくるので扱い方を熟知しておくとうよい。旋律を演奏する楽器も同様である。楽器の音色、鳴らし方(奏法)、音の高さなど特性をよく知り、楽曲の旋律の特徴をいかに引き出すことができるかをいつも思い描き、活動をすればよい。

(2) 楽器を使った活動例

打楽器を加えてリズムを工夫する。

キッズドラムや動物、フルーツの形のマラカスなどの打楽器を使用する。

遊び方の展開

曲目「BINGO」

4分の2拍子の曲である。歌詞 NGO と歌う部分に自分で好きなリズムを即興的に打つ。

①歌詞(BINGO)は、曲の中で3回繰り返されるリズム打ちをする。リズム打ちする1小節前を意識することで次の小節に上手くリズム

を入れることができる。

- ②小物楽器を使ってリズム打ちをする。それぞれの楽器の持つ音の高さの違いや、音色の違いにより、リズムに変化がもたらされ、その面白さに気づくことができる。
- ③リズム打ちの小節数を増やす。より緊張感が増し、拍を数え拍の感覚を身につけることができる。

曲目「とんとんとんとんひげじいさん」

4分の4拍子の曲である。歌いながら手遊びを楽しむことができる。

- ①手遊びをしながら、歌詞の登場人物（ひげじいさん、こぶじいさん、てんぐさん、めがねさん）の後に2小節リズム打ちを入れる。
リズムを挿入（2小節）

とんとんとん～	ひげじいさん	○ ○ ○ ○ 打楽器のリズム	○ ○ ○ ○ 打楽器のリズム
とんとんとん～	こぶじいさん	○ ○ ○ ○ 打楽器のリズム	○ ○ ○ ○ 打楽器のリズム

この曲は、1小節ごと音階的に順次進行し、手の動きも顎（ひげじいさん）・頬っぺた（こぶじいさん）・鼻（てんぐさん）・目（めがねさん）と顔を手で触れながら音が上がるにしたが手も上へ上へ上がっていく面白さがある。最後は両手を上に伸ばし、キラキラと手首を回しながら、膝の上に置く。手の動きで音階を自然に意識し、音が上行するにつれ気持ちも高まる感覚を覚える。音階の上行下行に伴ったクレッシェンド、デクレッシェンドにあたる音楽のおもしろさを、子どもは遊びの中で感じ取るのである。次にこの曲の特徴を生かしたうえで、曲の途中にリズム打ちの小節を挿入する。一瞬曲が中断されたかの感覚になるが、又その後続きを演奏する。この活動は、元の旋律の流れを止めずにリズム拍の小節が挿入されるので、次の歌い出しは、頭の中では前のフレーズや音程、次のフレーズや音程を想定しながらリズム打ちをしていくという、実にハードルの高い演奏法になる。それを遊びの中で行うことで、失敗も成功も両方楽しむことができる。そこに一つの価値がある。

遊びの中に色々な音楽的要素を仕組んでいくことに面白さと意味がある。

4. 保育者としての音楽指導

(1) 音楽の要素を生かす

幼児期の音楽活動は、技術の上手い下手を評価することはあまり意味がない。合わなかったり、上手くいったりする中で拍や音程が合い、響きそれを心地良く楽しむ体験を積むことこそ、大切と考える。このように、最初は簡単なリズム打ちから楽しみ、徐々に段階的に色々な要素を加えることで、自然な形で音楽の面白さを知り体験できる。子どもは、できないことや失敗も楽しみ、もう一回やりたいという気持ちで繰り返し行う。上手く拍にはまったときの感覚こそ、音楽の三大要素の一つであるリズム、拍の感覚を覚えることになる。集団の中で、音を通して互いに思いを通わせるコミュニケーションである。言葉を越えた、まさに音楽というツールを最大限に生かした活動である。そして、子どもが楽しいと感じていることが大前提で活動の意味がある。従って、保育者に求められることは、子ども一人ひとりがどう活動しているか常に把握し、様子を観察し、次のステップへもっていくタイミング、曲の速さ、声掛けの仕方等、多岐にわたり計算の上進めることが大切であることは言うまでもない。

(2) 保育者の創意工夫と、自ら楽しむ気持ち

昨今幼児教育現場では、様々な楽器が導入されている。それらをどう扱っていくか保育者は悩むところだが、創意工夫次第でとても手軽に楽しい活動が展開できる。そのためには、楽器を知ることになり、その楽器の良さや、特徴に気づき、自分なりに表現の幅を広げていく体験がある。そして初めて子どもたちのつぶやきや発見、感動に共感することができる。幼児教育においては、そこを丁寧に教えていきたい。また、音楽活動の経験の少ない学生には、基礎力を付けると同時に、音楽の楽しさを自身が体験し、目指すところは表現する楽しさということを伝えたい。そこには、もう音楽が得意とか苦手とかというレベルではな

く、保育者の創意工夫と自身が音楽を楽しむ気持ちが前面にできることが求められる。子どもたちも保育者と音楽の面白さを共有したいと思っており、子どもにとって楽しいと思える瞬間こそ、子どもの心が成長する時であろう。

1日園で過ごす中、いつも歌がある。様々な思いで登園する子どもたちは、歌うことや音楽を耳にすることで自分の世界に入り、心の開放や安心感を覚える。言葉で伝えきれないことであっても、少しの抑揚や旋律が付き何らかのリズムがあると、心地よい刺激となることであろう。ここで音楽は、コミュニケーションや言葉の一つとして捉え、音楽作品を演奏することと、構えてしまうことではない。身近であって、ごく自然な音である。すなわち、上手に歌えたとか、口が大きく開いているから素晴らしい、などと評価するものでもない。素直な気分で、子どもが何かを感じ、自分の中で想像をし、思いを広げていくその部分を大切にしたい。そのルーティーンである日々の繰り返しは子どもの成長とともに心の中に静かにあたためられて、豊かさを増し、感性となるであろう。

行事においてもその部分は大切に考えたい。とかく、保護者に、「見せる音楽」を求めがちであるが、子どもが音楽をどう感じて表現しているか、子どもたちの思いを伝えることのできる発表の場でありたい。発表会はパフォーマンスでもあるので、もちろん完成度や流行の音楽が保護者のニーズに加えられるが、何をもちて完成度を図るかを掘り下げたい。つまり、曲を仕上げることだけに目を向けるのではなく、ハーモニーやリズムなど曲そのものが持つ良さに気づき子どもたちと音楽を創り上げることに保育者が目を向けることである。一年を通し、行事はたくさんあるが、その節々で子どもは自分の姿を周りの大人たちに見てもらい成長していく。喜びが多いほど、心の成長も大きい。行事における音楽も大いに影響を及ぼす。日常の活動でも同様である。しかし、現場の保育者、先生、これから保育を目指す学生の中に度々耳にする言葉で「音楽は苦手」がある。おそらく「できる、できない」「上手、下手」の尺度でそれ

まで評価され、苦手という言葉で片付け、逃避していると思われる。

まず学生にはその考えを払拭し、本来音楽は楽しむ、自己表現するものであるという考えをするよう願いたい。簡単に言えば、音楽というツールを使ったコミュニケーションの一つであると考えを新たにすることである。得手不得手の部分でいう音感やリズム感、読譜、技術は理解や練習の継続が自ずから必要になる。個人の経験の差で技術の差が生じているのは現状であるが、それと音楽を愛好し、楽しむことは別次元といえる。苦手という文字が学生の意欲を半減させているのも現実である。もしかすると、彼らの潜在意識の中に、幼児期の何気ない大人からの偏った評価があるのかもしれない。

幼児教育に必要な音楽のスキルを段階的に習得するには、リピートと継続は欠かせない。音やリズムの持つ楽しさや、重なり合い、響き合う美しさに気づき、イメージを広げる、このことを幼児期に体験し、音楽を感じ成長することが音楽教育であることと、将来幼児教育を目指す学生に伝えていきたい。具体的には、音楽の要素である、リズム・旋律・ハーモニーを柱に、それら一つ一つを掘り下げ、それらを融合させ音楽が構成されていることを理解し、良さを感じ取る。さらに自由に思いを膨らませ、イメージを広げていくことである。学生は難しい理論は好まない傾向にある。そこで、学生自身がとつき易く、楽しいと思えるように作戦を練る必要性がある。

では、いくつかの具体例を挙げてみることにする。子どもはリズムをととても楽しむ。規則性のあるビートに合わせて、気持ちも体もリズムを受け入れる。ところが大人になるとどういう訳か頭で理解しようとし、できない、楽しめないというのをしばしば見る。そこで、リズムのパターンを習得するよう、実際の授業では、フラッシュカードを用い繰り返し常時行っている。その際、拍を意識すると、拍子感も身につく。速さを変えることで楽しさも増す。このような活動は、実際の保育現場でも子どもたちと行えるものである。授業で行う際は、学生自身のスキル習得と幼児教育実践

を兼ねた内容といえる。アドバイスややり方などは充分共通している。リズムパターンの習得は、読譜力のみならず、合奏指導における様々な打楽器パートのリズムにも応用発展できる。そのため、リズムパターンには、予め色々な要素を含むリズムを用意しておく。スキップやシンコペーションなどはそれだけでは、習得がむずかしい。そこで、パターンの中で練習することで意識付けを行っている。

次にメロディである旋律だが、これは音の高さと深い関係にある。音程である。子どもは1度耳にすれば、その旋律をすぐに覚える。だが、学生の中には音程を正しくとることができない学生も少なくない。聞こえた音を正しく歌うことは、実はかなり練習が必要である。まず自分の声をよく聴き、その微妙な音の上がり下がりや修正していく、繊細な作業ともいえる。やはり個別に行う機会を何度か必要とする。

歌唱においても器楽においても旋律であるフレーズは大切である。文章でいえば、句読点と置き換えられる。フレーズを感じ演奏することは、自分の思いを語るようなことだ。曲の中で、誰かと会話をしているかのような気持ちにもなる。そこには、自分なりの思いや表現が生まれる。伝えたいという思いも膨らむ。フレーズを意識する方法では、交互唱（奏）が有効である。相手の旋律を聴き、次の旋律をつながるように演奏していく。そこには、フレーズを意識しつつ聴くという活動がある。相手に合わせ、つないでいく。自然に相手を思いやる気持ちを持ち合わせる。まさにコミュニケーションである。

音楽は物語のごとく始まりがあり、展開、回想し終わりに向かう。その構成の中にも自由に入り込むことができる。緩やかさ穏やかさ、激しさ、静寂、喜び、悲しみ、怒り、・・すべての感情や情景が音により表現される。旋律と旋律が重なり合い、ハーモニーが紡ぎだされる。そこに同時に響く、協和音や不協和音をどう感じるか、そこが音楽の楽しみ方である。学生自身が体験し、知ること、幼児教育の実践に結びつく。知識や技能のみが重要と考えるのではなく、音楽が持つ本来の

力を知ることの大切さ、楽しさを重要と考えたい。

(3) 保育者に求められるスキル

リズム、メロディ（旋律）、ハーモニー（和声）は音楽の三大要素である。音楽の楽しさや様々な表現を知る上でこれらをより理解することが大切である。旋律の基本である音階、和声とも深く結びつく「フレーズ」についても触れておく。

①読譜力の習得

楽譜に書かれた情報をいかに読み解き、表現していくかはとても複雑で、かつ答えを導くのも難しいが、そこに隠されている音の世界は、実に興味深いものである。多くの音楽経験の少ない学生は、読譜を好まない。耳からの情報のみで演奏をしていることが多い。しかし、ピアノの演奏や、保育現場での音楽指導においては、読譜ができることは必要である。学生がいかに興味関心を持ち、読譜に慣れていくかを実践の中から挙げてみることにする。楽譜に書かれている情報とは、音の高さ、リズム、調、拍子、曲の表現方法である。

②音階の理解

音には階段のように、高さがある。その高さを表すために五本の線、五線を用い、上に行くほど音が上がり、下に行くほど音が低くなるということである。音の高さは無限であるが、五線の中で表せないものについては、上下の加線により示すことができる。音階は1音ずつきれいに並ぶ。そのことへの理解は、実際に手や体の動きを使うとより深まる。子どもも同様である。またこの手の動きは、歌唱の音程をとるのに有効である。跳躍する音程をとる際、手の動きで音の高さのイメージができる。子どもたちの活動でも、「ドレミの体操」と称し手を動かしながら階名で歌うことを常時行うことで、自然に音程の感覚が身につく。楽器によっては、独自の音域をもち演奏するものがある。ピアノのように音域の広い楽器もそうである。低音に関しては、加線の代わりに、低音部記号を用い、五線の中で音を示すことができる。これに関しても読むことに慣れる必要がある。高音

部記号（ト音記号）は・・お味噌汁（ドミソシレ）
低音部記号（ヘ音記号）は・・囚われ像（ドラファ
レシソ）と身近な言葉で覚えるといふ。学生のな
かには、楽譜の音符にドレミと書き込んでいるの
を見かけるが、それは、かえって読譜の妨げにな
ることもある。

③リズム

リズムについては、最も学生が苦手とすること
である。聴いたリズムは抵抗なくリズム打ちをし
ているが、読譜となると問題が起きる。これの原
因を探ってみることにする。1つは、音の長さを
表す記号としての認識ができていないことであ
る。そのために、音符を線で図式化する、実際
に声や音で鳴らしてみることなどつまずきを回
避できるように試してみた。多くの学生は、理
解できるが、中にどうしても苦手意識から理
解できない学生もいる。これは、リズムは、時
間や長さとは違い、設定した速さにより音符
の長さが変化するので、混乱を生じるのも否
めないところだ。具体的な方法として、リズ
ムパターンを用いて習得する方法が有効であ
る。音符をパターン化し、拍に乗せて読んで
いくトレーニングは効果を上げる。リズムパ
ターンを習得することで、合奏におけるリズ
ム伴奏や、8ビート、チャチャチャ、サンバ
などのラテンの曲のアレンジにも利用できる。
また、リズムのパターンでどの楽器にふさわ
しいか知ることでもできる。拍を感じて速さ
を変えながらリズムパターンを繰り返し練習
することは効果が上がる。実際の学生の授業
でも毎回常時活動的に取り入れ、少しずつ変
化を加えながら行っている。子どもの活動で
も同様である。

④拍の重要性

曲には拍があり、拍子がある。子どもの日常
の動きと関連させて言えば、より身近に感じ
る。

2拍子・・・歩く・行進・駆け足・スキップ

3拍子・・・踊り・ワルツ

6拍子（2拍子系）・・・ブランコ・ギャロップ

4拍子・・・チャチャチャ・サンバなどの動き
子どもの歌を調べてみると、2拍子の曲が多い。

わらべ歌もそうである。もともとは拍子があ
って曲が作られたのではなく、遊び方や動き、
日常の気分がそのような拍子に結び付くとも
考えられる。左右の足を前に出す歩く動きは
2拍子である。急ぎ足になると、速度が速く
なり駆け足となる。速い2拍子となる。嬉し
いと子どもは飛び上がり、そこからスキップ
となる。拍や拍子、速度はリズムと密接な関
係を持ち、音楽を表す大切な要素である。拍
を意識し歌ったり演奏したりできるように手
拍子をしながらの練習も取り入れる。

⑤フレーズを感じる

フレーズは、音楽を構成する短いまとまり
である。長調、短調、いくつかの調性がフレ
ーズの中あるいはフレーズごとに変化し曲が
構成されている。そこで音が重なり合い響き
合う和声の面白さがある。曲の形式を理
解することで曲全体を捉えることができ、音
楽のからくりや面白さの発見があり、そこ
で奏法の工夫に繋がる。またフレーズを意
識することはブレスにも関わってくる。ブ
レスこそ生きた音楽である。

上記①～⑤に挙げた具体項目を理解習得す
ることが保育者に求められると考える。

5. 生涯教育である音楽

音楽は、子どもの発達に大きく影響を及ぼ
しているだけでなく人生を豊かにする。それ
は、音楽そのものが持つ無限の力が我々の
潜在意識の中で様々な感情を呼び起こして
くれるからだ。たとえば言葉が発することが
できなくとも喜怒哀楽といった感情はだれ
しもある。生まれたばかりの赤ちゃんも年
老いた老人もみな感情を持ち合わせてい
るが、環境や心理的状况により感情を表に
出すことができないことも起こりうるだろ
う。人が生きていく中で寂しいことである。
驚き喜び怒り歓声を上げたわり他者とコ
ミュニケーションをとる、それが人間らし
い生き方であるとすれば、まさに音楽の力
はそこにその存在を必要とするであろう。
音楽の深さと感情は比例するのであろうか。
人の複雑で数えきれない感情は、2つとし
て同じ曲が存在しないように無限だ。同じ
曲でも演奏者

によって聴き手には様々な印象を与えてくれる。ある時は喜びを倍増し、ある時は悲しみや苦しみを共感してくれる。記憶の中に宿った音楽が再び呼び戻される時、不思議と当時の思いとともに肌で風を感じたように、ともすればその匂いまで思い出される。まさに五感の心地よい刺激だ。そう考えると、やはり音楽は、子どもの発達に欠かせないものであると同時に、生涯連れ添ってそばになくなくてはならないものである。幼児期に様々な感情を持ち自らが表現し、そのことに心を動かされ、楽しさや喜びを感じる体験を積み重ねることが、豊かな感性をもたらすと考える。そしてその体験が、人間性を作る一因となるであろう。大切なことは、時間芸術である音楽の持つ良さをいかに子どもたちに伝えていくかである。子どもの発達過程において、どのように音楽と関わるのかどのような音楽との出会いを求めるのか、さらに深めていきたい。

6. おわりに

我々は常に発想を豊かにし、場に応じた支援や工夫ができるよう柔軟な感覚を持ち合わせたい。そこには音楽の持つ本来の美しさや面白さ、さらには音楽が人間に与える大きな力について認識する必要がある。ただ、この曲は流行りの曲で、子どもたちがよく知っているからとか、可愛いからだけで曲を演奏するのではなく、保育者は意図をもって活動できるように行う必要がある。保育者自身も楽しさを見つけ、自らも感じ、楽曲の本来持つ面白さを見つけていくようにすることだ。

幼児期における音楽教育は、豊かな人間を育成する人間教育であると私自身常に考えている。そのことを念頭に入れておくと迷いはない。幼児期のわずかな蓄積の成果はすぐには見えないが、やがて成長とともに個々に開花することを見守りたい。

〈参考文献〉

- 「幼稚園教育要領解説」 文部科学省 平成30年
3月
「子どもの遊びとうた」 小泉文夫 草思社
1986年